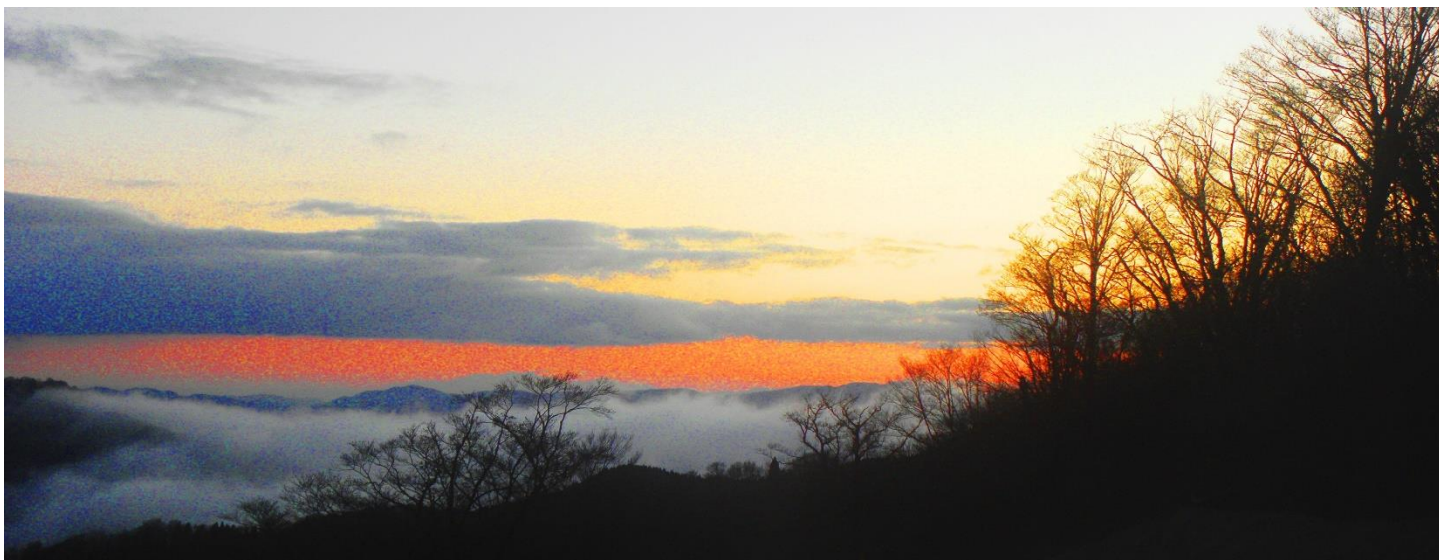




80代も後半になってしまった。ここらで家族をはじめ、お世話になったすべての人々にお礼を申し上げておきたいと思う。

長い文章になったが、感謝の気持ちを込めて書いたことをお伝えしたい。

自伝・金田 忍

自 伝 金田 忍

○ 私は福島で生まれ、宮崎で育った。

私は福島県で生まれた。謄本を見ると、原戸籍は伊達郡桑折町となっており、福島第一原発がある相馬郡に隣接している。父母は山形県の出身であるが、庄屋の地位を捨てて、群是製糸株式会社の社員としての人生を選んだようだ。出身地の長井工場から桑折工場への転勤を機に、家族ぐるみで故郷を離れたのではないと思う。郡是は社宅が完備していて、その後も頻繁に転勤があり、転居や転校の多い生活だった。幼稚園の頃、転勤で家族ぐるみで宮崎市内に転居したのだが、その頃までの記憶はあまり明確ではない。しかし、ただ一つ忘れることが出来ないのは言葉の壁である。東北弁すなわちズーズー弁しか知らない幼児が、これまた宮崎弁しか通用しない幼稚園に転園したのだからまるで外国へ行ったようなもので、さっぱり言葉が分らないのは当然として、一言ものを言うと発音がおかしいと笑われるのだった。そんなこんなですっかりしゃべらなくなり、先生が心配して家庭訪問してくれたそうである。標準語が通用しない、テレビもラジオも無かった当時を思うと、当然の成り行きであったろう。

小学校5年の夏、疎開先の山形県の母の実家で終戦を迎えた。その年の12月には宮崎に戻っているので半年ほどの疎開生活であったが、自然度の高い朝日連峰の東麓の集落だったので、第二人を連れてしょっちゅう山の幸を探しに山に通ったものだ。地元では笹米と呼ばれていたが、60年に一度といわれる笹が開花する年に当たっていたらしく、結実した実を手でしごいて一斗袋になん杯採ったであろうか。栗も大量に拾ってきては家計を助けた。

宮崎では高校一年の夏までを過ごしているが、宮崎でも兄弟三人で山へ、川へ、海へと食べ物探しにはよく出かけた。中でも汽水域に棲む手長エビはたくさん捕れたし美味しかった。そのころ空気銃はおもちゃの部類で、焼け跡から拾ってきた鉛で弾を作ってスズメを沢山獲った。七輪の炭火で焼いて食べるのだがとても美味だった。

○ 前橋高校の一年間

高校一年の夏には父の転勤で前橋高校に転校となったが、宮崎で採集して作った蝶の標本を持参して生物クラブに入部したところ、とても喜んでくれて親しい友達が三人も出来た。翌年の夏休みが終わるころ、再び父の転勤で京都府綾部市に転居することになるのだが、その冬にはスキーを体験し、春から夏にかけては赤城山に延べ一か月ぐ

らいも滞在して蝶の採集をしたり、アルバイトでボート番をしたり、外輪山を歩き回ったりと密度の濃い一年間であった。この時、県から借りて無料で使わせてもらった山小屋は、日本のスキーの開祖といわれる猪谷六合雄さんの自作によるもので、いろんな意味で私の人生に大きな影響を与えることになった。親友 3 人のうち 2 人はすでに亡く、一人は今年から年賀状も来なくなった。

○ 綾部高校から京都銀行へ

綾部高校には前橋で作った蝶の標本を手土産にして生物クラブに入れてもらったのだが、偶然にも校長先生が蝶のコレクターだった。標本タンスを数本持っておられ、何度か家にも招いてもらって見せていただいた。理系の先生方とは特別に親しくしていて、頼まれて下級生の実験指導などもしていたので、先生方は進学して教師になるものと思っていたらしい。

しかし父は結核で長期入院中であり、4 人も弟妹がいるので家計が苦しく、進学を諦めるよう親から言われていた。

夏休みが終わってすぐの求人に応募したのが京都銀行だった。地元の綾部支店に配属されたが、給料が安いのは驚いた。求人の時点では初任給は知らされていなかったのである。背広は一万円以上したと思うが、給料の手取りは五千円を切っていた。

5 年経った頃、本店営業部へ転勤を命じられ、銀閣寺の独身寮で暮らすことになった。なにしろ給料が安く、寮費を払うと 2000 円ぐらいしか残らないので、寮母さんに頼んで弁当を作ってもらい、近くの山歩きに出かけるのが休日の日課になった。市電の通勤定期を使って河原町三条で降りて京阪電車に乗り換え、浜大津からは江若鉄道に乗り継いで比良山麓の駅で降りては一日山歩きをするのだった。一日 500 円で遊べる範囲はこれが限界だった。親から小遣いをもらっている同僚は結構いたようだが懐事情は似たり寄ったりで、夢のない生活をだらだらと続けている人が多かったように思う。

○ 京銀山の会を立ち上げる

休日の山歩きは職場にも同好者を作り、山の会を立ち上げる機運を高めていった。高卒同期の T 君と K 君に相談して機会を設け、人事部長に臨席してもらって同好会として認めて欲しいと切り出したのだが、同好会を作るのは勝手だが補助金は出せないということで終わった。世間では大学山岳部の遭難事故が相次いでおり、登山は危険を伴うスポーツとしての認識が強い時期であった。

京銀山の会を結成して会員を募集したところ、120 人の申し込みがあった。行員総数がおよそ 1000 人であったから加入率は 10%を越えたわけで、多くの若者に望まれて誕生したことが分かった。月に一回例会を開いたのであるが、無線機もスマホもない時代だったので先頭と後尾の連絡が取れずに苦労した記憶がある。

事故もなく一年が経過したころ、同好会として公認し補助金も出すとの申し出があり、**京銀山の会**の運営は軌道に乗った。そのころの仲間は今でも親しくしている人が数人いる。

○ 京都野鳥の会に入会する

就職・長くて 5 年での転勤・転居・結婚などと環境はめまぐるしく変わっていったが、仕事は忙しくて残業も多く、年休もほとんどとれないという余裕のない日々を過ごしていた。

そんなある日、45 歳の頃だったろうか、近くに京都野鳥の会の会長が住んでいることを知り、電話をしたところ『自宅に遊びに来ませんか』と誘われ、京都野鳥の会に入会することになった。伊藤会長は日本野鳥の会の創始者・中西悟堂先生とも親しくしておられ、野鳥に関する著作もあって、著名な文人であることを知った。

京都野鳥の会は日本野鳥の会京都支部も兼ねていたのであるが、私が入会する数年前に分裂し、高齢者の多くが京都野鳥の会に分派したことを後で知った。これも後で知ったことであるが、伊藤会長は運転手を探すのが上手な

方だったそうで、私は私設の運転手に雇われたのだった。車の助手席に乗ってもらって運転している間、鳥や野鳥の会のことだけでなく、山やスキー、溪流釣りの話など少年時代にさかのぼって聞く話は、自然観と相まって興味深い話が多かった。

入会後まもなく、会に研究部を作るから部長をやってほしいと依頼を受けた。野鳥のことはほとんど知らない初心者なので研究など出来るわけでもなくお断りしたのであるが、研究部設置の目的は他にあって、幹事養成のためだという。分裂時に若いやりてはほとんど京都支部に行ってしまったので、会の運営に困っておられたらしい。山歩きやキャンプなど、今でいうアウトドアには経験もあったので、研究部員や幹事を引率して山歩きに精を出すことになった。芦生や木祖にはまだまだ野鳥が多くいる時代だった。

1983年から2006年までの24年間の春から初夏にかけての休日は、ほとんどの日を前夜から出かけて**野鳥の夜明けのコーラス録音**に費やした。

70歳を過ぎたころ、『日本の野鳥は最近歌が下手になった』と公言していたのであるが、原因が自分の聴覚の老化にあることに気が付き、潔く録音を諦めてすべての録音と機材を千葉県立中央博物館に寄贈することにした。以下はその時の京都野鳥の会への寄稿文である。寄贈に際しては、京都野鳥の会のカラスの専門家:中村純夫さんには大変お世話になった。お礼を申し上げる。

○ 夜明けのコーラス探しの旅を終えて(2010/10/17)・・・京都野鳥の会への寄稿文

野鳥の録音を止めて4年になります。耳が老化して高音部が聴き取りにくくなったのが原因で止めたのですが、20年以上録り続けてきた録音は千葉県立中央博物館(大庭照代先生)が引き取って下さることになりました。

録音を整理して調べてみたら、一番多く通った録音地は八丁平で53日(26%)、第2位は大江山31日(15%)、第3位は芦生の21日(10%)となっておりました。合計すると105日となり、総日数205日の51%を越える日数になります。これらの地はいずれも京都府下にあり、夜明け前に到着するように3時間か6時間前に私宅を出て、録音ポイントで夜鳴く鳥を録りながら、一番鳥が鳴くのを待ったものです。

私は、今では伝説となってしまった野鳥の夜明けのコーラスが聴きたくて、録音機を携えて春から初夏の休日の夜明けをねらって、これはと思われる地を訪ね歩いておりました。

録音を思い立った1983年は録音予定地の調査や録音機器の調達で終わり、翌年はいよいよ録音にかかりましたが、マイクを買い換えたり集音器・三脚を買い足したりしてまたまた一年が過ぎてしまいました。その年は京都野鳥の会の例会で長野県木祖村・藪原で録ったものが唯一の賑やかな録音でしたが、当時の伊藤会長に聴いてもらったところ、「目の前の人の言葉が聞こえんのですよ・・・」というほどに騒々しかった戦前の夜明けのコーラスには程遠いものであることが分かりました。この日から『夜明けのコーラス探し』の旅が始まったのです。

録音地の第一の条件は野鳥が多く棲息することですが、2番目には雑音の少ない所ということになります。それに度々出かけられる条件として自宅から近いところが望ましいのです。八丁平と大江山はいずれも車を降りて歩く時間を入れても3時間以内の地にあるのですが、芦生は車で2時間余り走ったあと更に林道と山路を夜中に3時間余りも歩くという遠い山中にありました。そのいずれにも騒々しいほどの夜明けのコーラスが無いことが分かり、1990年ごろからは信州の御嶽山や霧ヶ峰高原(八島湿原)・大台ヶ原などにも足を伸ばすようになりましたが、ついに伝説の夜明けのコーラスに出会うことはありませんでした。以下、録音地についての記憶をまとめてみました。

① 八丁平

通った日数が53日とは驚きました。八丁平は京都市の北部、左京区久多にあり、1000m 弱の稜線に囲まれた標高810mの高層湿原です。90haあまりの面積があり、堆積した泥炭の上にミズゴケやスゲ類が繁る特殊な環境として知られ、保全されております。湿原は乾燥化が進み、笹や樹木などが侵入するので植生なども年々変化しており

ますが、野鳥たちにとっては好ましい環境であるらしく、特にウグイスの棲息密度が高いのは驚くばかりです。5 月下旬から 6 月にかけてはホトトギスの仲間が勢ぞろいして賑わいますが、この地で繁殖する野鳥の数が多いことを裏づけしているとも言えるでしょう。

湿原の周りの山は緩やかで谷の水音も静かですし、山に囲まれているので風の音が低いのと街や道路からも遠く離れているので人による雑音はありませんでした。留鳥であるカラ類、キツツキ類は 3 月頃から繁殖期に入らしく陽気の良い日にはさえずりで賑わいますが、夏鳥たちの繁殖期は 5 月から 6 月にかけてが最盛期となります。

八丁平は京都駅を基点にして 30km 北部の山中にあり、車を降りて更に 1 時間ほど歩くことになります。私はたいてい夜中を過ぎてから出かけてゲート前に車を止め、出来るだけ明かりを点けないで入山するのが慣わしでした。ある時、木道でシュラフに包まって寝ている人を踏みそうになり、夜が明けてから再び出会ったときに「市会議員の S です」と名詞を出されたのには驚きました。あの頃環境保護運動が激しく進められており、その主要メンバーだったようです。この山域では今でもキャンプは禁止されていると思います。

② 大江山

大江山は京都駅の北西、約 80km 余り(道路距離では 100km)の日本海に近い所にあります。今では福知山市に編入されましたが鬼伝説で有名な里であり、また、元伊勢、天岩戸、皇大神宮、外宮、稲荷社などの史跡や神社をめぐる社寺林もそこそに残されています。録音ポイントは大江山(833m)の東側斜面の中腹にある大江山稲荷社(630m)の境内ですが、ガラス張りの休憩所があり、無料で利用させてもらえます。休憩所はテラスの上に張り出して造られており、下の森林帯(神社の森)に向けて録るには絶好の設計となっておりました。夜になると福知山市、綾部市、舞鶴市などの街の灯りも遠望されますが音までは聞こえてきません。休憩所の前まで舗装道路が来ており、畳の上で休ませていただけるので野鳥の会の人などを案内するには安心で、喜んでも戴きました。ただ、天気の良い日には日の出を撮りたい写真家が車でやって来て無遠慮に振舞うので困ったこともありました。

前日の明るいうちに休憩所について窓を開け放し、夜中じゅう鳥の声を聴きながら寝るのは最高の贅沢でしたが、この辺りでは非常に珍しいヤイロチョウの声を聴いた夜と、屋根の上に張り出した枝にコノハズクがやってきて大声で鳴いた夜は眠れませんでした。

② 芦生

芦生は京都市の北方約 40km にある京都府南丹市美山町の一角で、福井県と滋賀県に府県境を接して広がる森林地帯です。1921 年以来京都大学農学部の演習林として貸し付けられて林業の演習や研究に利用されてきましたが、1980 年頃から自然保護運動が強まり、原生的様相を残した天然林として保全される方向に向かい、総面積 4200 ヘクタールのうち約半分は保護・保全されることになりました。伐採された残りの森林も自然に植生が回復しましたが、21 世紀に入る頃から鹿の食害とカシノナガキクイムシによるナラ枯れ病が全域に広がり、森林環境は著しく変わってしまいました。

それまで林床を一面に覆っていた笹が完全になくなり、8 割以上のミズナラが枯れてしまったのですから林床は乾燥し、そこで生活していた昆虫や両生類、爬虫類、哺乳類など多くの動物が姿を消しました。野鳥も当然影響を受けて棲めなくなり、かつての野鳥の楽園は消滅したのです。録音は貴重な生態系の記録となってしまいました。

当時は京大芦生演習林と呼ばれておりましたが入林には京大の許可が必要で、原則として徒歩での入林となります。滋賀県側から回りこんで地蔵峠の手前で車を止め、車中で仮眠したあと午前 0 時に出発して徒歩で地蔵峠を越えます。コノハズクを聴き、星を眺めながら福井県境の杉尾坂や、中心部の傘峠などへと向かいましたが、途中ではいろいろな動物とニアミスをしします。闇夜でもライトを点けずに歩くので姿を見ることはありませんが、時にはイノシシや鹿などの大型動物が足元からドドッと地響きをたてて遠ざかることもありましたが、一度だけですが数メートルの距離で熊にうなられたこともあります。なぜか恐怖心は起こりませんが、逆に言うと恐怖心が起こらないから森の動物の仲間に入れてもらっているのかも知れません。

④ 御嶽山

御嶽山は 3000m を越える独立峰で、南の尾根に開発された御岳高原リゾートには国設御岳スキー場に続いて御岳高原スキー場があり、標高 2200m の田ノ原天然公園まで立派な舗装道路が続いているので車での夜行には安心して出かけることが出来ました。合計 12 日間の録音がありますが、未明から早朝にかけては人も車も少なく良い録音が残っています。その頃御岳高原にはスキー目的で毎冬数日泊まっておりますが、五合目の村営八海山荘の支配人とも親しくなり、野鳥が多いので餌台の設置を勧めたところ、ロビーのガラス窓の外 2 メートルの近くでゴジュウカラ、ヒガラ、シジュウカラなどが恐れる様子もなく餌を採るようになり、さすがは木曽の人だと感心したことがありました。木曽は飼い鳥文化の中心地だったのです。また、ハレー彗星がやって来たときはスキーを兼ねて見に行きましたが、窓辺に割り箸くらいの大きさに彗星が架かっているのにびっくりし、寝ている支配人を起して見てもらいました。その名残が星の子銀河村キャンプ場として名前が残っております。

六合目より下の御岳高原はスキー場や保健休養地として開発し尽くされ、森林限界にある田ノ原の三笠山(2256.1m)だけがまとまった森として残されました。その結果だと思われませんがその森に森林性、高山性の野鳥が過密とも思えるほど多く見聞されました。中でもルリビタキの合唱はすさまじく、クキイタダキなどの声を聴き取るのは容易ではありませんでした。六合目から上は山岳地帯で傾斜も急になり、強風の影響で樹木は低木化し、更に登るとハイマツ帯へと続きます。一度だけ頂上まで録音機を持って登りましたが、噴気音がごうごうと物凄く憧れのアマツバメの声は余り良く録れませんでした。

⑤ 八島湿原

霧ヶ峰高原も車での夜行には安心して便利な録音ポイントでした。八島湿原とその周りでは夜明け前からノビタキやオオジシギ、カッコウ、ホトトギスなどが賑やかに鳴きだしておりました。暗闇の中で草むらに座り込んで、ノビタキの哀愁を帯びた歌を聴いているのはなかなか良いものでしたが、ビーナスラインの八島から直接諏訪に降りる林道から見下ろす森林地帯も野鳥の声が多いことに気がつき、そちらの方は何度か放置録音をしました。1995 年に舞台収録用のマイクロフォン(ECM-999 SONY)を手に入れて集音器なしで録ってみたところ、素晴らしい夜明けのコーラスがあったことが分かりました。なぜか良く分かりませんが、録音をとる時には傍に人間が居ないほうが、自然な録音が録れるような気がします。この森林帯を通る林道はその頃閉鎖されていて、車は勿論、人もほとんど通りませんでした。国定公園の山域となっていて鬱蒼とした樹林に覆われていたところ、林道が拓かれて森にも陽が差し込むようになり、棲む野鳥も増えたものと思われれます。

放置録音はあちこちで試みましたが、人が傍に居ては起こりえないような場面を想像させるような録音もいくつかありました。とくに夜明けのコーラスは、野鳥が動き回る様が想像できるという意味で、集音器を使わないステレオの放置録音は面白いと思います。

⑥ 大台ヶ原

大台ヶ原は紀伊半島の中央部にあり、吉野熊野国立公園特別保護地区に指定されているので良く自然が保全されています。しかし日本でも有数の多雨地帯なので水の騒音のない録音ポイントは限られます。

京都からは大和平野を縦断して市街地を走り、険しい山間部を通り抜けての道のりが大変で、前夜に出かけて夜明け前に録音ポイントに着くのは、なかなか大変な録音行でした。途中には大峰山や和佐又山などがあり、録音をとりながら、車で回るのが慣わしでしたが、野鳥の密度は多くなく、魅力的な録音ポイントは多くはありませんでした。多分公園全域が自然度が高く、多雨のため自然が新鮮なので野鳥は分散していたのだと思います。

⑦ 内山

内山は同じ京都府下でありながら車では 4~5 時間もかかり、植生や野鳥は面白いのですが、たびたび行ける場所ではありませんでした。『内山ブナ林』は「京都の自然 200 選」に京都府が選定し保全しており、京都府京丹後市大宮町五十河(イカガ)内山にある約 40 ヘクタールのブナ林と、その山腹の台地にある廃村跡地(標高 370m の

屋敷跡、農地等)からなっております。丹後半島の中央部にあり、大変な豪雪地帯で、昭和 7 年に廃村となり、昭和 48 年に最後の居住者が離村して、その遺族の要望により公の手により公園整備が進められ、保全されております。

京都府は植物部門でこの環境を「京都の自然 200 選」に選定しましたが、京都府のホームページによりますと『幹回 3.6m というブナの大木がある自然林・・・、このほか 100 種を越す樹木、それに倍する山野草、そして 89 種の野鳥も確認されています』とあり、自然度が高いことが分かります。

『内山ブナ林』は伐採される寸前に地元の自然愛好家(数学・天文学でも専門家)・平井久夫さんが私財で買い取り、自然保護教育のサークルを立ち上げて、やがては大宮町民の森となり、更に展開して京都府民の森となりましたが、人間だけでなく野鳥や色々な生き物にも棲みよい環境となったようです。野鳥の種類も多く録音には良い環境なのですが、ヒヨドリとカエルの「騒音口害」には閉口しました。入り口には自然観察施設「ブナハウス内山」があり、ここを基地にすると早朝の録音には便利です。

⑧ 北海道

私は北海道の自然に憧れておりましたが纏まった時間が取れないので、在職中は「せめてサツポロ」とビールはサツポロに決め、更科源蔵さんなどの北海道文学や、アイヌに関する記述に親しんでおりました。定年を迎えて落ち着いた時期の 1997 年に、録音好きで北海道出身の U さんが案内するというので、私の車に録音機と野外生活に必要な道具、食料などを積み込んでカーフェリーで出かけることになりました。その翌年と合せて 22 日間の録音の旅でしたが、近畿や信州には無い、想像以上の壮大でワイルドな自然に接し、録音もたくさん録れて満足しました。

梅雨の無い筈の北海道でほとんど毎日、雷や風雨に遭いましたが、それなりに楽しく変化のある旅となりました。ただ、北海道の夜明けは早く、早暁 3 時には野鳥が鳴き始めるのと、U さんの鼾が凄くて睡眠不足には悩まされました。

北海道と本州の間にはブラキストンラインがあり、生物相が違うと言われておりますが、オオルリは近畿や信州とは違う歌を持っているようです。京都近郊で初めてその歌を聞いたときは、録音機を携えて 40 分ほど追い回して、ようやく姿を見てオオルリだと分かったのですが、そのときは変なオオルリもいるものだと思います。それから 5 年経ってその謎が解けたわけです。

北海道の自然は変化に富んでいて、野鳥は環境に合わせて棲息するので、近畿や信州みたいに色々な種類の野鳥が一斉に鳴くという状態ではありませんでしたが、やはり朝はコーラスと呼べるほどの賑わいがありました。特に海岸近い原野での野鳥の歌声が一番印象に残っています。

1997 年は、舞鶴、小樽、札幌、留萌、金岡原生花園、サロベツ原野、稚内、宗谷岬、ベニヤ原生花園(連泊)、クッチャロ湖、紋別で観光・宿泊、オムサロ原生園、岩尾内湖、層雲峡、愛山溪温泉、ほろしん温泉、札幌森林公園、北大理学部、小樽、舞鶴という旅でした。

1998 年は、舞鶴、小樽、野幌森林公園、札幌、静内、賀張、平取、二風谷、新冠、白金温泉、富良野、白金野鳥の森、東大演習林、トムラウシ、東大雪、然別、かんの温泉、帯広、然別湖、上士幌町博物館、置戸湖、上川町、愛山溪、丸瀬布、浮島温泉、金八峠、知床、霧多布、足寄、日高、札幌、小樽、舞鶴という旅でした。

⑨ 島嶼の鳥

島では京都野鳥の会の特別例会で出かけた三宅島(3 日)および西表島(1 日)、石垣島(1 日)での録音があります。いずれの島でも野鳥と人間は混然と生活しており、民家の庭で野趣たっぷりの録音を録りました。昔の文学者や芸術家、画家などの中には、島に住みついて制作や著作に励まれた人も多かったように思います。私も短期の旅行ではなく、滞在してじっくりと島の自然を味わうのも良いかなと思いましたが実現しておりません。

⑨ 西京区

私が住んでいるのが西京区です。録音を始めた 1980 年代は市街地近辺では非常に稀だったキビタキ、オルリ、クロツグミなどの歌い手が、1990 年代以降はだんだん増えてきて、その季節にそのつもりで出かければ必ず聞かれる

ようになりました。これは野鳥の数も増えたかも知れませんが、市街地近辺の緑の回復によるところが大きいと私は考えております。戦中から戦後にかけて伐り尽くされて疲弊した禿山が、今では緑に覆われて街中から見回しても伐採跡すら発見出来ないほどに植生が回復し、樹木も大きくなりました。樹木が実を付けるようになり、昆虫などの餌が確保されるようになると野鳥もそこに棲み、繁殖できるようになる筈です。ただ、2000 年以降は鹿の食害と、ナラ枯れ病の拡大により、森林の植生が一年一年顕著に変わっており、野鳥の生息数や生活にも大きな影響が出ているものと思われます。

***** 寄稿文終わり

眼も耳も野鳥観察には適さなくなり、伊藤会長はじめ多くの尊敬する先輩たちが亡くなられたうえ、不愉快な事件なども発生して**京都野鳥の会を退会**したのは 2014 年だったと思う。

○ アサギマダラの移動調査

アサギマダラの会に入会してアサギマダラの移動調査に参加したのは 1996 年である。その頃アサギマダラの越夏調査の中心地は比良山スキー場だった。そのフィールドのオーナーの U さん(私大教授)は近所に住み、野鳥の会の会員でもあった。渡り鳥の調査には公的な資格が必要であり、一般市民には難しいことを知ったので U さんに誘われるままに始めたのであるが、たちまち熱中してしまった。眠っていた昆虫少年の血が蘇ったのである。比良山系の山々は年間最多 50 日も歩き回っていたし、春夏秋冬の自然や植生についても熟知していたので、やぶ歩きを苦にしない私のほうが捕獲数も多くなり、翌年からは 5km 南にある**びわ湖バレイ**スキー場をフィールドとして調査することになった。

びわ湖バレイには、林 久明さんや大島新一郎さん等が先に入っておられ、おなじ虫屋として排除されるのではないかと不安があったが、温かく受け入れていただいただけでなく、親切にいろいろご指導もいただいた。二人とも 2019 年に亡くなられてしまったが、寂しい限りである。

びわ湖バレイと比良山スキー場は標高 1000m 前後の南北の稜線でつながっており、夏の滞在期にも相互移動があることが定量的に証明され、大きな成果として評価された。

草原としてのびわ湖バレイのスキーコースは 2000 年に入ると間もなく終わりを告げた。シカが増えてアサギマダラの吸蜜・誘引植物であるヨツバヒヨドリを喰い尽くし、スキーコース全面を覆っていた群落が消えてしまったのである。シカの食害の影響はヨツバヒヨドリ群落の消滅にとどまらず、森の下草をすべて喰いつくし、森の生態系を変えていった。丸裸になった林床にはシカの食べない植物が生え始め、やがてバイケイソウ、トリカブトなどの猛毒を持つ植物が群落を作り、イワヒメワラビ、コバノイシカグマなどのシカが喰わない**しだ植物**が林床を覆うまでの間には、何度か大雨もあって、無防備になったスキーコースの土を流し去り、岩がごろごろした河原に戻ってしまったこともあった。**アサギマダラのパラダイスとしてのびわ湖バレイ**は終わったのである。

○ 平地の秋のアサギマダラ

アサギマダラの越夏地、繁殖地としての調査は出来なくなったので、調査の中心は平地での秋の南下時の調査に変わっていった。2005 年には京都西山山麓の寺院の庭のフジバカマに飛来するアサギマダラが多数見られ、2006 年には大阪・高槻の芥川のみズヒマワリに信じられないほどのアサギマダラが飛来したのである。こうしてアサギマダラの調査は山地から、平地のフジバカマへと移っていった。教育効果の高いフジバカマ花壇のある小学校が増え、民間のフジバカマ栽培グループも数十を数えるほどに普及したのである。

時あたかも観光都市・京都では、2008 年の源氏物語千年紀の祭典を前にして、KBS テレビが中心になって**”護ろうフジバカマ・源氏物語千年紀”** キャンペーンが華々しく展開されていた。

○ 水尾のフジバカマ畑でのアサギマダラ調査

原種フジバカマを発見して保護増殖に取り組んでいる乙訓の自然を守る会に私は所属していたので、水尾の休耕田に大規模なフジバカマ畑が出来ると早速声がかかり、調査を許してもらった。2011年の秋である。南北に連なる愛宕山(900m余)の西側、つまり京都市街からは見えない裏側の山腹(250m)に、それほど多くのアサギマダラが飛来するとは予期できなかったのであるが、多い日には1000頭を上回るアサギマダラの乱舞が見られた。このニュースは新聞やテレビなどを通じて全国に広まり、大規模なフジバカマ花園が全国に作られるきっかけとなった。この年は1147頭を捕獲し標識しているが、北の越夏地からの再捕獲が10頭含まれ、水尾で標識したものは、南の地で38頭再捕獲された。

水尾での調査は8年間続くのだが、滑り出しは順調ではなかった。住民の中にはアサギマダラが可哀そうだという人もいて、イベントの時間中はもちろん、それ以外の日でも畑に立ち入り出来ないようになり、2018年をもって高齢を理由に引退した。

しかし、水尾での調査では数々の貴重な成果が得られた。すべては私のHPに収録してあるので興味のある人は参考にいただきたい。(<http://kyoto.d.dooo.jp/>)

○ 京都府中部のアサギマダラ

2019年からは、京都以北で越夏繁殖したアサギマダラの多くは、京都府中部山岳地帯を通過して南下移動するのではないかという仮説を立てて調査を進めている。理由は長くなるので書かないが、前記HPに記載してある。この年この地域で約2400頭余りの標識を行い、数多くの再捕獲があって手ごたえを感じている。

○ アサギマダラ文化

アサギマダラの会は、アサギマダラの調査研究のための団体として立ち上げられたものであるが、今日ではアサギマダラ文化も多様化していろいろな人がかかわるようになった。

ひっそりと庭にフジバカマを植えて年一回のアサギマダラの飛来を待つ人から、北海道から沖縄までアサギマダラを追って旅をするのを楽しみにしている人さえある。中でもほほえましいのは小学校でのフジバカマの栽培である。アサギマダラは教育効果の高い昆虫であると言った人があるが、挿し芽から開花まで当番を決めて水遣り続け、秋のアサギマダラの飛来を待つというのは多様な教育効果を感じる。

○ 私とスキー・・・四都市スキー大会で優勝する・・・

前橋高校1年の冬、その頃は珍しかったスキー指導員を父に持つ友人の勧めでスキーを体験し、たちまち虜になった。上越の水上市にある大穴スキー場だった。軍靴を改造して作ったスキー靴にエッジのない距離競技用の長い板で、曲がれないのでもっぱら直滑降ばかりして楽しんだのを覚えている。

高校2年の夏には綾部高校に転校になり、今度は父の会社のKさんが誘ってくれた。京都府北部には山陰線沿いに夜久野スキー場があり、府県境を越えると兵庫県神戸市の神鍋スキー場も遠くはなかった。その頃父は長期療養のために入院していたので、一冬に1~2回だったと思うが、苦しい家計の中からよくもまあスキーに行かせてくれたものだと感じている。

勤務地の綾部市にはスキー協会があって入会すると仲間が増えた。近隣の綾部市・福知山市・舞鶴市・宮津市の四都市対抗のスキー大会が毎年開催されていたが、綾部市は万年最下位だった。大会当番は四都市の回り持ちで昭和41年(1966)は綾部市の当番であり、市長が出席することになっていたのに、何としても最下位は免れたいとの気持ちが強かったのだが、他の三都市には国体選手OBなどがいて選手層が厚く、悲観的であった。

一方、綾部市には競技経験者が少ないどころか、選手の数もそろわないという始末で、市長から職場の長へ文書で

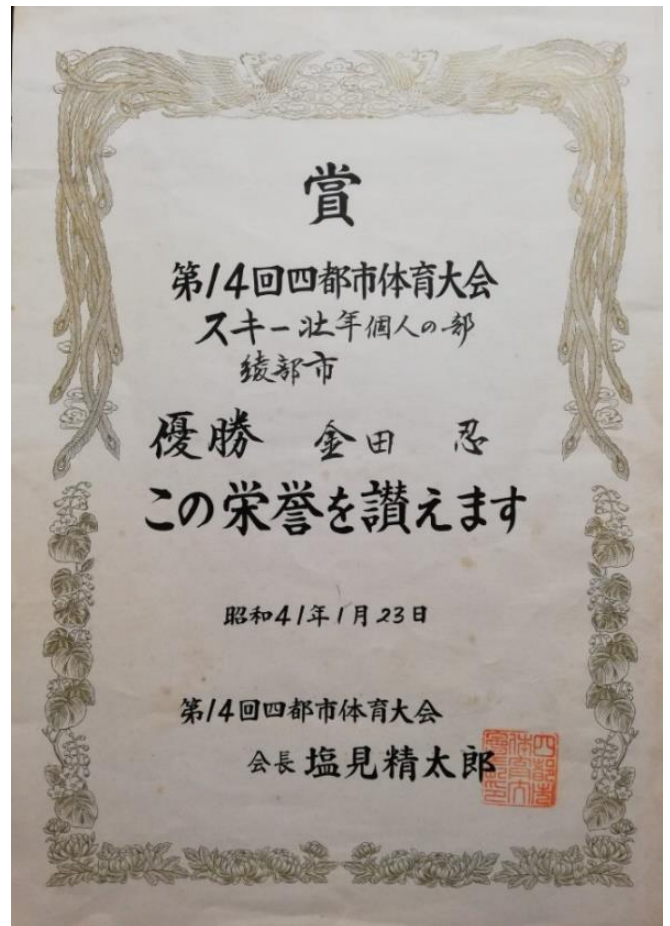
依頼があり、壮年の部で出場することになった。私は元来、競技よりも山スキーのほうが好きで、競技スキーはほとんど経験がなかった。大会が開催されたのは新しく福知山市にオープンされたゲンゼスキー場で、整備されていないのに加えて雪が少なく、気温が高かったので大変荒れたスキーコースとなった。こうなると山屋の独壇場で、あっさりと優勝してしまったのである。団体でも三位に入賞して大騒ぎになった。それ以来、綾部の友人たちには良くしてもらっている。

日本にスキーが伝えられたのは明治末期のことであるが、一般に関心が持たれるようになったのは 1956 年の第 7 回冬季オリンピックで猪谷千春が 2 位に入賞したのがきっかけとなった。1960 年代にスキーは普及して若者のスポーツとして定着していった。綾部には戦前派のスキーヤーが数人おられ、日曜日毎に神鍋スキー場に連れて行ってもらった。その方たちは今は亡い。

1961 年には比良山スキー場が開設され、1965 年にはサンケイバレイ(後のびわ湖バレイ)スキー場がオープンしてスキーブームが到来した。リフトなどの設備が普及して徐々に解消してゆくのだが、休日などはリフト待ちが 30 分にも及ぶこともあり、混雑を極めた。

混雑しない平日にもスキーに行けるようになったのは、父を送り、退職した 1995 年以降である。期待通り平日はスキーコースもリフトも待ち時間なしで快適に滑ることが出来た。調子の良いときには一日 40 回もリフトに乗ることがあり、目標を 40 回に定めて頑張ったのであるが、シーズンの日数では 2015 年の 33 日が最高だった。

ちなみに一日 40 回というノルマをもう少し具体的に説明すると、びわ湖バレイのメインコースは蓬莱山(1174m)にあって、高差 125m、リフト長 500m、コース長は直線で 500m というシンプルでコンパクトなゲレンデだった。待ち時間がなければ 4 分で回れることもあったが、だいたい午前中にノルマを達成して昼食を済ませて帰途に就く習わしであった。40 回で計算すると高差 5000m、滑走距離 20km にもおよび、モンブランよりも高差のある滑走をしていたわけである。80 代ははじめの頃であった。



・・・スキー遠征のトピックス・・・

大山スキー場・のべ2か月間

八方尾根スキー場・のべ2か月以上

御嶽高原スキー場・のべ1か月あまり

立山の春山スキー・数年間連続

八甲田山・2005年・単独

ウイスラー＆ブラッコム・2008年・銀嶺会

野沢温泉スキー場・2012～2016・3兄弟で3泊4日

○キノコ採り

『東北人はキノコ民族である』と書いた人があったが誰だったろうか。親は2人ともに山形の出身で、私も東北生まれである。血のせいか、山を歩いていても鳥を見ていてもキノコはずっと気になる存在であった。記録を見ると47歳(1981)の時に関西菌類談話会に入会し、以後20数年間も会費を払い続けていた。

私にとってキノコとはいわゆる木ノ子であって、木に生えるしかも美味しい食菌類だけであった。なかでもマイタケ(見つけたら手舞い、足踊るというから舞茸)は憧れのキノコで、その情報を得るために関西菌類談話会に入会したようなものだった。北国のキノコだと思っていたマイタケが、京大芦生の演習林に記録があることを知り、マツタケの季節が来ると演習林に通ったがマイタケが見つかったのはそれから13年後のことで、キノコ民族といわれた東北人の父も母もこの世を去った後だった。それまで天然のナメコを採って帰って両親を喜ばせてはいたが、マイタケは仏壇に供えるしかなかった。

13年の月日は決して無駄に過ぎ去ったわけではなかった。マイタケの生態を勉強するかたわら、山歩きのそれも、キノコ採りの山歩きにと進化していった。何ととっても13年の一番の成果は、マイタケは早い年には8月末には発生するというものを発見したことだった。

マイタケは同じ老木に数年続けて出ることが分かり、財産(生える老巨木)は年々増えていった。そんなある日、東北・青森のキノコ採りの孫を自称する青年が軽四輪トラックで日参するようになった。

多く採れた日には、荷台いっぱい並べて20～30kgも持ち帰るのである。しかも未明の暗いうちから懐中電灯の明かりを頼りに歩き回るのであった。素人の私たちが対抗出来る相手ではなく、私たちの収量はたちまち減っていった。



2000年に入ると、今度はカシノナガキクイムシがミズナラの老木を枯らし始めた。マイタケが出ていた樹はほとんど枯れてしまい、追い打ちをかけるように鹿の大群が福井県境を越えて入ってきて林床の植物を喰いつくし、丸裸にするのに5年とはかからなかった。森は精気を失い、虫も両生類も爬虫類も鳥も獣も魚も棲めなくなったので

ある。かくして**芦生の森は死んだ**。

○ 花の山旅・・・白山と北アルプス

父の介護が大変になって退職したのであるが、父は退職したその日に突然亡くなってしまった。1995年9月である。母も半年後に後を追うように亡くなり、あと始末も一段落した1996年の夏から**花の山旅**は始まった。

まずは白山というわけで4年間続けて登り、そのあと7年間は北アルプスに通ったが、花の多い季節と場所を選んで歩く企画が多かった。企画してガイドしてくれる弟はそうでもなかったが、私はカメラを持ち歩き、高山植物の写真を熱心に撮って歩いた。ホームページを開設した70歳(2004年)以後については一部収録してあるが、『どうして』と言いたいほど美しい花が多かった。

3000m クラスの高山でのアサギマダラの生態についてはあまり知られていなかったが、晴天で風のない日には、高山植物の花で吸蜜するアサギマダラが頻繁に見られることから、アサギマダラは気温が高ければごく日常に高山にも上がってくるのではないかと思った。陽光が当たると地表の空気は温められて軽くなり、斜面上昇風が起こるのである。アサギマダラは体力を使わなくても、翅を広げているだけで斜面上昇風に乗って高い涼しいところに移動できるわけで、理にかなった生活だと思った。



満85歳を迎え、四捨五入すると九十歳になった。『百歳まで生きて、ピンピンコロリで行きましょうな・・・』と言われたこともあるが、介護されながら生きながらえても生きた内には入るまいと思う。私にとっての生きた証は、最低でも軽い山歩きが出来て、できれば遊びでいいからスキーもやりたいと思う。それを知っているスキープロショップのNさんは『三浦敬三さんのように百歳まで・・・』というのだが、百歳で親子孫曾孫で滑った映像を見ている私には老醜としか見えなかった。初めて高齢を体験している日々は戸惑うことばかりである。

とはいえ、**死に支度**は始めている。いま一番気にかけているのは、自分が大切にしてきた趣味を、道具とともに孫に伝えることである。

スキーは2017年春に小学生の孫2人を万場スキー場に連れてゆき、いっぺんでスキーの虜にしまった。あとは孫の近所に住むUさんが連れて行ってくれているので私の仕事は済んだと思っている。

その孫たちは街灯も多くない山間に住んでいるので、ぜひ星座を見る楽しみを知ってもらいたいと思って、バードウォッチング用の頑丈な三脚やプロミナー、双眼鏡などを譲り渡したが、今のところ成功してはいない。中には高価なものもあるが、私が大切にしてきた**”物”**だけでなく、文化をつけて伝えたいのである。

もう一つは読書の楽しみである。私は小五で漫画を卒業し、図書館通いを始めたのであるが、孫たちにはスマホなどもあり、なかなか本を読もうとはしない。困った。



私は家族にも友にも恵まれて良い人生だったと思っている。特に妻には感謝している。家庭を顧みず山に出かけて好きなことをさせてもらえたのは妻に負うところが多い。妻に、家族に、友人に、そして私の人生にかかわったすべての方々に深く感謝の意を捧げる。有難うございました。

(2020.02.17 義弟の葬儀の翌日記)